第1章　第3節　朴烈と金子文子

1. 朴烈事件前夜の世界情勢

朴烈事件の発端は1923年9月1日の関東大震災にあったが、その背景には新興労働階級の勢力拡大と無政府主義運動が社会底辺に波及して行くことを憂慮する日本帝国主義者達の神経過敏が根本原因となっている。

19世紀以来列強の植民地争奪戦は激化の一路にあった。20世紀に入り、列強の対立が尖鋭化するに従って、勢力均衡のための国際的同盟関係が形成されていた。ベルリン条約以来胎動した三国同盟対三国協商が即ちその実例であり、極東では、ロシアの東進政策とドイツの対アジア政策を封じるため日英同盟(1902)が締結され、続いて1904年露日戦争が勃発した。

一方中国は阿片戦争と義和団事件以来列強の勢力争いの場となって至る所にいわゆる租借地という半永久的占領地が生まれ、中国大陸を侵略していた。ことに日清・日露両戦争で勝利した新興日本は北中国を侵略しながら帝国主義列強の一員として登場していた。

1905年ポーツマス条約の結果として韓国には日帝統監部が設置され、外交権を剥奪し、遂に1910年8月29日韓日合併条約が強制的に調印されたことで、大韓帝国は日帝植民地に転落して、総督政治が始められた。

最初各国の利害関係が深刻に対立した状態に維持された武装平和は長く続かず、結局人類の歴史で類例を見ない世界第一次大戦が起ってしまった。1914年7月に戦争が始まって5年を経過する間にヨーロッパ各国で反戦論が強力に台頭した。

戦争が長期化し敵同志が死力を尽して戦う間、三国協商の一国であるロシアでは1917年初め革命が起った。虚無党以来、ウクライナの独立農民党、白ロシアの左派社会革命党、社会民主党、青年層と宗教界等各派各界で蜂起し、1917年3月帝政を崩壊させて社会民主党右派であるメンセヴィキに属したケレンスキーの臨時政府が樹立された。しかし、ケレンスキー政府は無為無策革命を正しい方向に導けなかった。社会民主党左派であるレーニンのボルシェヴィキ党は各派革命勢力を離間、籠絡してケレンスキーから権力を奪取し、ブレストリトブスクで対独単独講和条約を締結して、除隊、帰還将兵で労兵会を組織し、自派の武装部隊を作り、各派革命勢力を操縦、弾圧しながらレーニンのボルシェビキ独裁政権を樹立した。こうして、クロンシュタットの水平反乱とウクライナのアナキストマフノが導く農民義挙を西欧帝国主義によって操縦された陰謀と非難し、各個撃破の手法で弾圧して真の人民革命の道を封じた。

こうしてロシア革命はボルセヴィキによって反動化していたが、この事情をよく知らない植民地及び反植民地民族達に及ぼした影響は大変大きかった。双方交戦国政治家達も当初想像も出来なかったひどい破壊と国力消耗に驚愕を禁じ得なかったし予期しなかったこの異質なロシア革命は一大衝撃とならざるを得なかった。

しかし、ロシア革命が起って8ヶ月後の1818年1月米国ウィルソン大統領は侵略的帝

国主義国家間の戦争原因となっている領土的野心と民族的復讐心等を抑制し、侵略によって占領された弱小民族国家に民族自決主義を適用することで、人類万代の恒久的平和を実現する。かの有名な大戦講和14ケ基本原則を議会に送った教書で公表した。不割譲、無賠償及び民族自決主義がその骨子であった。

このような世界の新潮流を受け入れて、1919年3月1日我が民族の自主独立を宣言する3・1運動が全国津々浦々で燎原の火の如く起った。3・1運動は韓民族のみならず東西の弱小民族に直接、間接的に大きな影響を及ぼした。1世紀にわたって欧米列強の支配下にあった中国に対して、日帝は欧米諸国が戦乱に陥っている隙をついて、山東、福建両省に対する満州以上の特権要求と青島を中心とする膠州湾一帯のドイツ租借地権引継接収及び大連、旅順の遼東半島租借期間延長等を含めた21ケ条を中国政府に脅迫、強要し、密かに、その承認を受けた。それにも脆弱な中国政府は抵抗するすべがなかったが、パリ平和会議とともに北京大学生を中心に起った5・4運動を契機として排日抗争を挙国的に起こし、民族更生の出発点とし、この運動の結果パリ講和会議及びワシントン会議を通じて、中国の南北代表が日帝の陰謀を暴露して、21ケ条秘密条約はうやむやにしてしまい。ワシントン会議の終りで、山東半島及び膠州湾は中国に再び帰順した。その他にフィリピンでもマニラ大学生及び有志青年達が政治家達と協力して平和的な独立運動を起こしたし、インドも3億余の人口の民族的大集団で、大英帝国統治下に解放を企てしから久しかった。このような反侵略主義的植民地、半植民地の解放運動はエジプトでも見られた。1919年夏、エジプトでは完全独立を目的とする民族運動がカイロを中心として青年学生を先頭に起ったし、英国と7-8年も血戦を続けたアイルランドもシンペン党を中心とした熾烈な独立運動で、1919年に不完全ながら所期の目的を達成させた。このような諸民族の独立運動が世界的新機運に刺激されたといえども、我々とその始期を同じにした点で、またその方法と手段において我々が先鞭を加えた点で、我々の3・1運動が全世界民族解放運動線上に投げかけた影響と役割を高く評価出来るし、また我々の3・1運動は弱小民族解放線上においてのみならず、その力が日本の労働運動、社会主義運動にまで直接、間接の影響を及ぼしたことにも、共に注目しなければならないのである。

3・1運動以後、日帝の武断政策が変化して、文化政治という懐柔策を用いるようになったので、国内では青年会、社会団体等各種団体が多数結成され、直接間接的に日帝に抵抗したし、日本でも第一次世界大戦以後、思想運動が活発に展開され、特に東京帝大、早稲田大の学生と少壮教授グループが主軸となった。森戸辰男教授を中心とする東京大学の新人会、京都帝大の労学会、早稲田大学の人民同盟、建設同盟等がその例で、一次的に普通選挙運動を呼びかけある程度の成果を収め、政党運動へと発展するようになり、遂に1925年鈴木文治の労働大衆党が出現したのである。これに

比べ、日帝当局の圧力も加重されたが、同年、悪法の標本ともいう、いわゆる治安維持法を公布して労働階級の勢力を弾圧、けん制しようとした。日帝は一層あがきを強め、労働者勢力の拡大を妨害、離間する弾圧と分解工作は極限に達したし、これに対応する大衆運動方式も相当激烈した。人類の平等で自由な秩序を希求するアナキスト達は暴力的直接行動で敵を打倒して、自由を守護しなければならないというロシア虚無党領袖でアナキズムの実践的先駆者であったバクーニンの影響を大きく受け、直接行動で権力に対抗したのである。

朴烈もまさに、そうした人間として、抑圧された民族のうっ憤をこのような方法で吐露し、植民地主義者、半植民地主義者達に対する直接行動を辞さず、一方で「不逞鮮人」という雑誌を刊行するなど、強烈な抗日独立と社会主義運動を継続する間に、1923年大震災を受けた日帝は計画した韓国人虐殺陰謀を敢行した。その陰謀の一つの方法としていわゆる保護検束という名目で逮捕して、朴烈大逆事件に発展させ、死刑を宣告するに至ったのである。

当時 日本の政治局面は、戦後日英同盟が破棄される等で世界的に強力な発言権をもちながらも孤立した形勢を自招していた。中国では度重なる排日運動が年中行事として継続され、米国では日本人移民禁止法が公布され、日本人の市民権を剝奪するなど微妙な対立を見せており、これと時を同じくして日本最大の惨禍である関東大震災が起ったので、あわてた日本政府は朝鮮人とアナキストを虐殺しようとした。それで、1923年9月1日 大地震が爆発するやいなや 奸悪な日帝は発作的に虚偽の流言を言いふらして朝鮮人を虐殺しながら 日本社会主義運動の指導的人物であるアナキスト大杉栄夫妻を暗殺して、あらゆる手段方法をつくし、当時多い思想的同調者を持っていたアナキスト達に弾圧を集中しようとしたのである。

2. 黒濤会

3・1運動に前後して日本にはすでに相当数の労働者と留学生が渡っていた。1921年在日朝鮮人は約4万名に達していた。国内の独立宣言に先だって東京留学生達の2・8宣言が現れているところにも、すでに我々は十分にこれを判断出来る。ところでその留学生達の大多数は働きながら勉強する苦学生達であった。

1917年1月 洪承鳳は「東京労働同友会」という苦学生団体を組織したが、1921年1月朴烈、鄭泰成、金天海、崔甲寿、李起東らがこの団体を「在日朝鮮人苦学生同友会」と改称、拡大した。

3・1運動直後4月に白南薫、卞熙鎔、金俊淵、崔承萬らは、吉野作造、福田狂二らが主宰する黎明会に元鍾憲、鄭泰成、權熙国、李増林、金鴻林、林世熙らは堺利彦のコスモス倶楽部と高津正道の暁民会及び加藤一夫の自由連盟

等に出入りしながら日本社会主義者達と接触していた。一方 朴烈，元鍾麟，金若水らは日本のアナキスト大杉栄，岩佐作太郎らと頻繁に接触して彼らの思想に共鳴するようになった。

1921年10月 元鍾麟は新人連盟という思想団体を計画して趣意書を作って同志を糾合した。金判権，権煕国，鄭泰成，曺奉岐，金科全(若水) 朴烈(準植) 林沢竜，張貴寿，金思国らがこれに呼応して，同年11月29日「黒涛会」が創立された。これが在日朝鮮人思想団体の嚆矢をなした。

この団体の中には民族主義，共産主義，無政府主義等各思想潮流が合流していたが，「黒涛会」という名称から見てその中で無政府主義が優勢だったことがわかる。

黒涛会の最初の課業は，新潟県信濃川ダム工事場で起った朝鮮人労働者集団虐殺事件に対する抗議闘争であった。朝鮮の労働者達は日帝の植民地搾取政策に因って土地と生計を剝奪された極限状況で，生きる道を求めて日本に渡って来た人達である。彼らは日本人労働者の半分にもならない安値で日本の労働市場に売られて行き奴隷の如く酷使されていた。そうして集団虐殺まで受けて，これは，到底看過出来ない重大な社会問題であった。

1922年9月7日 東京YMCA講堂で開かれた朝日合同糾弾大会で黒涛会員達は日本人社会主義者達の応援を得て経過報告と共に烈しい煽動的演説を敢行した。この大会の特色は民族的差別と迫害に対する民族解放闘争を被圧迫階級解放闘争の形態で国境を超越した連帯性の下に展開することでもって大衆的基盤を構築した点にある。黒涛会は同年7月と8月に朴烈の主幹の下機関紙「黒涛」を発刊した。

一方同友会幹部達は新思想の普及のため，1922年1月ソウルに帰った。同年2月4日付朝鮮日報に「全国労働者諸君に激す」という題で同友会宣言が発表された。我が同友会は日本の重要な思想団体及び労働団体と提携して労働大学を設立し雑誌「同友」を発行することで労働運動を展開するが，今は苦学生と労働者の救護機関であることを中止し，階級闘争機関であることを宣言するということがその要旨であった。これは国内において公開文書で階級闘争を宣言した最初である。

黒涛会が単純に独立運動団体として出発した当初には各流派の思想がその中で共存出来るが，一旦階級闘争を宣布して社会運動に転向するや，まず民族主義者と社会主義者にわかれざるを得ず，後者が再び共産主義者と無政府主義者に分派せざるを得なかった。

こうして1922年12月 黒涛会は朴烈一派の黒労会(風雷会)と金若水一派の北星会に分裂して，両者が各々独自的活動をするようになった。黒労会は翌年2月再び黒友会と改称し，機関紙「不逞鮮人」を発刊した。この機関紙は1・2号を出した後，「現社会」と改題された。

3. 国内運動の胎動

海外ではすでに日本以外にも1917年上海で申奎植の朝鮮社会党が組織され、1918年には露領ハバロフスクで李東輝の韓人社会党が組織され、社会主義運動が胎動していた。

国内では3・1運動後の1919年4月臨時政府に代表として推戴するために義親王李剛を上海に案内して行っていて、新義州駅で日警に発覚した大同団事件が発生した。このとき全協は逮捕され、李乙奎は逃避していて、翌年1月再びソウルに潜入して、李鍾郁、梁起択らと共に連通制という地下組織を結成して検挙され、2年の刑を受けて保釈中上海に亡命した。ところで、大同団の三大綱領中には「社会主義を徹底的に実践する」という一項が入っており、この団体は国内最初の社会主義的結社と見ることが出来る。

1920年7月8日付東亜日報によれば無声映画弁士鄭漢高は、映画上映中に無政府主義を宣伝した嫌疑で逮捕された。同日張道源(26才、咸興生)も逮捕されたが、彼は法廷で「私は民権の平等と無政府を望む」と陳述した。(1920・7・8東亜日報) 張は我が国で検挙された最初のアナキストとして咸興地方法院において1年6ケ月が求刑された。(7・18 東亜日報)

1921年2月高順欽は李重華、徐廷禧、李桓発らと共にソウルで労働共済会を組織して、印刷工組合、電車従業員組合、理髪師組合、洋服職工組合等を傘下に包摂した。同年10月朴烈は一時帰国して、ソウルで李康夏らと共に黒労会を組織しておいて再び東京に帰った。このとき高順欽との接触があったかどうかは明らかでない。

同年7月金敬注(26才、東洋大学哲学科、仏教青年留学生)はクロポトキンとコッセルの人物及び思想を紹介し、彼らの精神を崇拝して実践しようと強調してアナキズムを宣言した嫌疑で検挙され晋州支庁で6カ月の刑を受けた。国内において思想運動で体刑を受けたのはこれが初めてである。

1920年5月14日付東亜日報は次のとおり記事を掲載している。

最近中国の過激思想は次第に拡大の徴候を見せ、4月下旬厦門では「無政府主義派の説」と題した小印刷物を配布して猛烈に無政府主義を宣伝する者が現れ、一層煽動する中でこれらは上海方面から入って来たとして厦門警察と知事はこれらの取締りを強めようと目下厳重調査中である。

1921年3月14日付同紙は再度次のように報道している。

中国政府は上海地方官庁からしばしば報告があり舊来の無政府共和党首領劉師復らが上海で秘密裡に無学舎を設立して、平民主義を鼓吹し、無政府主義を宣伝しようという小冊子を印刷して、各地に分布したという報告を受け、これを取締ろうと次のような方法を決定した。

一、過激主義[redacted]を提唱する者は厳重に処分して、秩序の紊乱を防止すること。

一、露国労農派の政策と学説もまた禁止すること。
一、北京政府が定めた自治方針は各公民がこれを違反しないこと。
一、自治の回復を請求する者は、分別して法外の行動をなくすこと。

これらの記事は当時中国での社会運動状況をうかがえる資料を提供しているが、この種の記事が度々国内新聞に報道されているという事実自体が当時我が国でも社会思想に対する関心度がぐんと高まって来ていることを語ってくれるものと思う。それは当時の若い知識層に少なからず刺激激剤となったことは間違いない。

1923年1月11日付東亜日報によれば、日本の堺利彦を招いて釜山、ソウル、平壌において次のような演題で講演会を開くことにしたという。

1、世界革命と朝鮮の将来
2、創造人の使命と朝鮮民族
3、現代社会主義の意味と将来

4、日帝の残虐性

20世紀に入ると、日帝はアジア全域にわたって暴悪非道な侵略の魔手を伸ばして来たが、自国内でもまた到底話すことのできない行状をふるまった。1910年5月幸徳秋水のいわゆる「大逆事件」において、そして、1923年9月東京震災時の大杉栄夫妻虐殺において、日帝はその残虐性を遺憾なくあらわしている。自国民に対してさえそうだったから、異民族に対するその野蛮的横暴は話す余地もなかった。我々は3・1運動当時のその苛酷な弾圧と、東京震災時の朝鮮人無差別大量虐殺で彼らの永遠にぬぐいえることのない罪悪相をしっかり記憶している。

日本のアナキズム開創者幸徳秋水(1871~1911)は1903年に週刊紙「平民新聞」を創刊して、1907年にはこの新聞を日刊に改め、平民主義、社会主義、平和主義を社是とした。日露戦争時は反戦の旗を掲げて孤軍奮闘平和を擁護し、日本の韓国侵略を猛烈に非難した。

1907年11月3日天皇の天長節には在米社会革命党で発行した「テロリズム」という題目の印刷物が各地に出回ったが、それは「日本皇帝睦仁君に送る」という書題で「貴下の祖先と称せられる神武天皇も…猿類から進化した者で特別な権能を持った者ではない…かわいそうな睦仁君、爆弾は貴下の周囲で今にも爆発しようとしている。」という内容の脅迫状であった。それは軍閥派桂内閣の野蛮的弾圧政策を糾弾する方法で、その頂上を為している日本天皇を狙ったものであった。こんなことがあった後、日本の官憲は血眼となって国内極左派巨頭であり、在米社会革命党の産みの親幸徳秋水を除去しようと決めていた。

やがて異常な何かが起るのではないかという沢うつな時が静かに流れていった。そんな中で若い同志達がしばしば平民社に出入りしていた。彼らは血気に溢れややもすれば注意心に欠ける面があった。しかしながら自由がない室内の狭い空間では、そうして彼らが顔を合わせれば、当局の苛酷な行動やその最終的責任を負うべき天皇制に対してうっぷんを爆発させるのが常であった。秋水は強いてやめさせなかった。そんなはけ口を、どうやめさせようかと考えたのである。

その中の何人かは天皇暗殺を行動化しようという考えを実際に頭に描いていたようである。当局は、もっともらしい理由をつけあげ足を取って極左分子をすっかりせん滅し、余勢をかって社会運動全般に撤退させようと決めていたようだった。そうした間に、先程の若者若干がその網にかかってしまった。大体このようなことが1910年5月25日検挙された いわゆる「大逆[redacted]陰謀」未遂事件の実質的内容であったのである。

この事件で起訴された24名の若者と無理やり彼らの連累者として送られた幸徳秋水とその妻管野須賀子ら合計26名は取調べや公判も法の手続きを踏まずに判決を急がれ1911年1月19日24名に死刑が言渡され、それから1週間も過ぎない24日と25日に12名が処刑された。国内外の抗議騒動に余裕を与えないためであることは明らかであった。こうして明治時代の日本アナキズムの金星幸徳秋水は刑場の露と消えた。

日帝侵略の元凶伊藤博文がハルビン駅頭で安重根の義弾に倒れた1909年と彼らの侵略[redacted]政策を厳しく攻撃した秋水が処刑された1911年との間に韓日併合という犯罪行為が引き起されている。我々はここに正義と邪悪との葛藤が両極の相克で演出されている歴史の一断面を見ることが出来る。

我々は日帝がその残虐性を表わしたもう一つの事例を思い起こそうと思う。1923年9月1日関東大震災が突発した。日帝は破廉恥にもこの未曽有の天災地変を社会主義撲滅の機会に悪用した。彼らはいわゆる「主義者」と「不逞鮮人」が不逞な計画を陰謀しているという根拠のない流言蜚語を言いふらし、大きな不安と恐怖に陥っている人心を扇ぎ根棒、竹槍、日本刀などで朝鮮人を大量虐殺する野蛮な惨劇を演出し、また社会主義者をめちゃくちゃに引っ捕まえた。この時、東京を中心として、その周辺に2万の朝鮮人が住んでいたが、その中で6千名が殺害されたので、よく惨状を想像することが出来る。

このとき大正年代をおしなべて、日本社会主義運動において最大の影響力を持った日本アナキスト大杉栄も虐殺された。彼の最も親しい同志の一人近藤憲二は、その経緯をこのように語っている。

アナキスト大杉栄は妻伊藤野枝と共に9月16日横浜市鶴見に避難中の妹弟を訪ね、そこに残している甥橘宗一(7才)を連れて帰る途中、淀橋柏木の自宅付近において憲兵隊の一隊によって拉致され(その時淀橋警

察署の松本警部補、滋野巡査部長が道案内をしたようで、後このことで取調べを受けた。）その晩、3人が殺害された。場所は麹町憲兵隊本部だったといい、憲兵大尉甘粕正彦、同曹長森慶次郎、同上等兵鴨志田安五郎、平井利一、本多重雄らによって絞殺されたというが、果して、殺害かどうかは明らかでなく、現在までも一つの謎として残っている。…… 大震災の混乱に便乗して社会主義者と朝鮮人に対する反動的宣伝をいいふらし、一般民衆のテロリズムを煽動したこと、亀戸事件（亀戸署に留置された労働組合員平沢計七外8名が9月2日習志野騎兵隊によって刺殺された事件）、大杉栄事件等軍隊の一部が直接これを犯行したこと、習志野騎兵隊、憲兵隊等の残虐行為がうやむやに隠されたということ、これらに一連の関連があり、この官憲と軍閥の行動は労働者階級と進歩的知識階級の大変な憤怒をかもし出した……

震災の焦土を踏み再起して同年12月第4期「労働運動」を発刊した。近藤憲二和田久太郎ら同人は創刊号巻頭に「戦友の死」という題の追悼文を載せている。

同志諸君！戦友の屍体を燃やす煙りが立ち昇っている。しかしながら、同志よ、この偉大な死の灰の下に、また彼らのような多くの人々の死灰の下から我々の自由という立派な木は育つだろう。

このように、日本の暴悪な政治権力は二人の卓越したアナキスト指導者幸徳秋水と大杉栄を十字架に打ちつけれなかった。このことがあった後、大杉栄の下手人甘粕大尉狙撃、震災当時の戒厳司令官福田大将狙撃等アナキストによる一連の報復テロが誘発されている。

5. 朴烈事件の真相

日帝がこのような断末魔的悪行をした原因は何であろうか。当時の内外情勢が彼らを極度に刺戟したことがその原因となっている。帝政を打倒した1917年のロシア革命、日本全国を襲った1918年の米騒動と戦後の世界的恐慌、1919年朝鮮民族の挙族的蜂起、急進的に発展する自国内の労働運動と左翼勢力等々の内外情勢が彼らの神経をひどくさかなでたことである。

従って彼らは3・1運動に際し、また東京震災時に重大な罪悪を犯した。戦慄するほどのこのような罪悪を犯しておき、彼らには世界の耳目と人類の良心の前に、それを偽る煙幕が必要だったのである。朴烈事件は確実にこのような必要を充足する材料となったのである。

前に述べたとおり、朴烈、金若水らは1921年11月在日朝鮮人最初の思想団体である黒濤会を組織し、翌年12月金若水一派の北星会と朴烈一派の黒友会に分立して、後者は機関紙「不逞鮮人」を発刊していた。ところで1923年9月1日関東大震災が突発

したのである。

震災に便乗した日本官憲の「主義者」一斉検束で、不逞社全員も除外されるはずがなかった。名目上は保護収監だったのである。まず捕えておいて、ほこりをはたくためである。捕えられた者もどんなわけか判らず、捕えた側でも何が出るか予想出来なかったのである。しかし捕えた側では霧を散らして宝物を探すように何かを探し出そうとしたのである。

1ケ月以上経った10月16日付東亜日報は「上海爆弾事件、震源は無政府主義者の大陰謀」という大げさな題目で次のような記事を載せた。無政府主義者と爆弾というテーマである。

○ 本件は朝鮮にまで拡大する模様 ／ 関係者はほとんど逮捕されたが警視庁では近日中に出張

東京警視庁特高課では先月3日にわかに活動を開始、東京にある朝鮮人無政府主義団体、朴烈一派を検挙したが、その内容に対しては伝わる話がまちまちで、真相はわからないが、いろんな話を綜合して見れば、これは前記朴烈が中心となり、一部日本人無政府主義者の援助を受けて計画された大陰謀であり、この計画は既に今年4、5月から着々と具体化された模様で、警視庁でもその形跡を判断して来たという。

○ 爆[redacted]弾をまめて満州地方に特使を

彼らは計画を実行するために、多数の爆弾が必要であるが、金はなく、取締りは厳しく、日本では困難と判断して、8月上旬同志の一人である○○○を満州に派遣するようになり、ソウルを経て国境を越えて、○○○に幾日か滞留中、彼は直接行動で有名な義烈団金元鳳一派と気脈を通じて、当初目的とした爆弾を手に入れた。爆発物50個の授受を本月3日と期したちょうどその時、東京地方の大震災が起こり、東京付近の秩序が紊乱することに、朴烈の行動に疑いを抱いた警視庁は一層朝鮮人無政府主義者を監視するようになり、一方で○○○側でも大震災を機会として急速にその計画を進行するような形跡があり、前記○○○に滞留中であった○○○に対して爆弾の受入れを催促し、○○○も義烈団と交渉の結果、爆弾50個を本月3日授受することに決まった。

○ 爆弾は[redacted]上海で押収、同類は秘密裡に押送

その後、警視庁で世田谷の陰謀団本部を急襲するようになった結果は分からないがこの時、検挙が実行された前後に東京から秘密電報を受け、朝鮮総督府では勿論全朝鮮に対して大捜索を行って、遂に先月29日前後数日間に前[redacted]記○某以下○名を○○○と○○○の地方で逮捕すると同時に偶然問題の爆弾50個は上海フランス租界にあるということを知り、急いで同地総領事に通牒を発して、交渉した結果、爆弾は押収して、嫌疑者数名も全部9月30日に警務局から秘密裡に東京まで押送したという。

○ 金元鳳 上海でこの話を聞く

上海で押収された爆[redacted]弾は、すでにカバンに入れ、それを持って来る青年は旅行準備までしたときに、捕まったが、このうわさを聞くやいなや北京に渡って形勢を観望していた金元鳳も驚いてその翌日上海に発ったという。

○ 警視庁捜査班 朝鮮に

以上のような重大な陰謀事件は東京警視庁と警務局の活動で水泡と帰したが近近警視庁では特別高等課で数名の捜査班を編成し朝鮮に派遣するということから見れば前記○名の関係者はまだ満州地方に残っている模様である。

そのように書かれた脚本である。しかしながら脚色が非常に下手である。真実が如く聞かされようと、あれこれ耳に入り、あいまいに書かれていることが歴然としている。だから素直に受け取れない。

関東大震災は空前絶後の大天災であった。死傷者総数23万6千余名、焼失家屋38万143百余戸、被害総額4千億(年間予算12億程度)というのが公式統計である。地軸がゆれ、地面が割れて、くずれる建物と衝天する火災の中に数千数万の人命がいっぺんに下敷きや焼死するむごたらしい状況の中で、一党が集って大陰謀を謀る情況がどこにあっただろうか。震災が起こるやいなや、日本の官憲は日鮮人の間にいわゆる「主義者」をくまなく探して、保護収監という名目で捕えた。この時「不逞社」同人達も捕えられて行ったのである。一個所に集っていて一挙に捕ったのではなく、時刻を違えて、あちこちで一人づつ、二人づつと捕ったのである。

「4.5月頃より着々と具体[redacted]化した形跡」をすでに気付いていたと言った。それならどうしてわざわざ天災地変が突発することを待たなければ逮捕出来なかったのか。憲兵隊につかまり井戸の中に暗殺された大杉栄夫妻と7才の幼い甥もどんな大陰謀を謀っていたのか。亀戸署に[redacted]監禁した9名の労組員を引き出し、騎馬隊が銃剣で刺し殺したのもどんな陰謀を図っていたためであろうか。興奮した民衆を煽動してこん棒と竹槍で罪のない朝鮮人を6千名もめちゃくちゃに「粉砕」させたのも、どんな陰謀を謀ったためか。何回も話している爆弾50個のうち、ただの一個でも物証があったか。

このような天人共怒の犯罪を犯しておいて、ずうずうしくも「無政府主義者の大陰謀」という煙幕を張って世界の耳目を逃れようとする言葉にだまされる者がどこにいるだろうか。

続けて、10月18日付同紙は次のように報道した。

○陰謀事件に結ばれた情話

〜 朴烈とその愛人、[redacted]恋と主義の共鳴で監獄にまで行った 〜

昨紙に報道した東京震災当時大陰謀を計画した無政府主義者の首領朴烈という朝鮮青年は東京に長く滞在し、同志社会主義者を糾合して、「黒潮

「不逞鮮人」等の主義宣伝雑誌を発行した青年であるが、その後に従い、目下彼と共に鉄窓に苦しむ花のような女性が1人いる。それは他でもない「不逞鮮人」等の雑誌に、朴文子という名前でしばしば気を吐く日本女性 金子文子(22才)である。彼女は早くから朴烈と恋に結ばれ、主義と愛には国境がないという良い模範を見せてくれた朴烈の愛人であり、彼と彼女が出会うまでの金子文子の前半生は実に一巻の小説になるものがかくれているという。

ここで暫く朴烈と金子文子の経歴を見てみよう。

朴烈は本籍を慶尚北道南慶郡麻城面梧泉里98番地に置き、1902年2月3日慶北尚州郡化北面杜岩里で貧しい農夫朴英洙の三男として生まれた。1916年京城高等普通学校に入学したが、3・1運動に参加した嫌疑で退学処分を受けた。

1919年東京に渡り、新聞配達をしながら正則英語学校に通った。1921年から鄭泰成、金天海らと共に以前の労働同志会を在日朝鮮人苦学生同志会に改変して、社会[redacted]運動に参与し、同年11月金若水、曺奉岩、金思国、元鍾麟舞、鄭泰成らと共に黒涛会という思想団体を組織して、1922年12月金若水一派の共産主義と別れて、黒労会(後に黒友会と改称)を組織し、機関紙「不逞鮮人」を発刊した。この頃、日本アナキスト指導者若佐作太郎、大杉栄としばしば接触していた。

金子文子は本籍を日本山梨県諏訪郡村192番地に置き、横浜市垂町70番地に住所を置いた佐伯文一と金子菊の長女として1904年1月25日に生まれた。家の生活は貧しく、両親は不和だった。そうしたある日、佐伯は金子母子と息子賢俊を捨ててどこへやら消えてしまった。母親は紡績工場の女工として2人の子供を育てていたが、もちこたえることが出来ずに再婚してしまった。

1912年(9才の時)朝鮮忠北文義郡芙蓉面芙浦里に居住するおば山下ひさし(その夫岩下敬三郎)の養女について行ったが、虐待された。おばの家は果樹園を経営し、高利貸金業も兼ねて[redacted]いたが、朝鮮人農夫に対する主人達の冷遇に対して彼女は自己の立場からいつしか同情するようになっていた。芙[redacted]江尋常小学校と芙江高等女学校在学時は成績が優秀で読書熱が非常に高かった。

1919年(16才)に山梨県に帰った。その時父親佐伯が現われ、おばの息子金子文栄(庵子の住持として相当な財産を持っている)に文子をとつがせた。しかし、夫婦間の性格が合わず、未だに向学心がさめなかったことから結婚生活を放棄して、東京に苦学のために出発した。叔父の家で洋服店の手伝いや、新聞販売員、夜市場露店、女中などを転々として正則英語学校に通った。そして社会主義者堀清俊の家に同居し、印刷所の文選工として働き、有楽町のある食堂の仕事を見るようになったが、ここには多くの社会主義者が出入りしていた。

1922年3月鄭又影が発行する「青年[redacted]朝鮮」誌に掲載された朴烈の詩

を読んで彼に関心を持つようになり、鄭の紹介で彼と出会った。その時の朴烈の姿は、ぼさぼさ長い髪によれよれの服装をした青年であった。しかし、何回か会ううちに彼の思想に共鳴し、遂に生死を共にする同志となった。文子は逆境に点綴された青春を送りながら、常に「真の自分自身とは何か、自分の青春を捧げるべき仕事は何か」という迷いがあったが、朴烈に出会ってすべての懐疑が消え、生への強烈な意欲が湧き出たという。

10月12日付同紙は継続して、次のとおり報道している。

○　○○陰謀、関係者殆んど逮捕、一人だけ残して、近日中に内容が発表されるだろう。

東京○○陰謀事件関係者は○○○1名だけを残して、その他17名はすべて検挙されたが、そのうち日本人は去る9月下旬頃高知市で検挙された栗原一男と巣鴨署に留置された小川まさ、金子文子、新山初代、野口品治ら5名で、この事件を近いうちに解禁発表する予定というが、これについて警視庁正力官房主事の話を聞いたところ、○○事件は残る一名を捕えれば全員検挙出来ることになるが、○○と金子と新山の三人はすでに市谷刑務所に収監し、全部で19名のうち○○は震災によりどこかで死んだ模様である。この事件は○○の計画もあり、非常に重大で大審院まで行くような○○事件以上の重点だという。

3ヶ月後の1925年1月27日付同紙は次のとうり報道したが、このとき初めて「○○陰謀事件」という表現を「大逆事件」という用語に替えた。

○　大逆事件連累者　朝鮮青年を釈放

昨年12月中旬　逮捕取調後　2名無罪放免

黄海道海州郡翠野里に本籍を置く金相赫(30才)魚海(20才)兄氏は昨年12月中旬頃大逆事件共犯として東京警視庁に逮捕され、厳重な取調のあと、近日無事に放免されたが、その内容を聞けば、前記兄氏は一昨年10月中旬頃、黄金町2丁目に潜入し、無政府主義者高島一派と気脈を通じて某事件を断行しようと秘密裡に相談した後、武器を手に入れようと前記金氏は露領に渡り、魚氏は京城に滞在して通信事務を取扱い、高島は資金運動のため東京に渡って活動していたところ、昨年3月25日、大逆犯として逮捕されたが、この噂を聞いた魚氏は7月下旬大阪に渡り、金氏も8月下旬日本に入って高島の系統を探す一方、朝鮮筋肉労働者連盟を組織して活動中、同年2月3日魚氏が東京で逮捕、次いで金氏も大阪で逮捕されて東京警視庁に護送され厳重な取調べを受けた。前記兄氏は高島と連絡はあったが、何も実行した事実が無いとして無罪放免

ひどくいいかげんな内容である。処理方式も釈然としない。大逆事件連累者であ

れば、実行した事実が無いと言えども、容易に釈放出来るだろうか。実行した事実が無いとして、無罪放免に出来る「大逆事件」であれば、朴烈と金子文子もやはり同様ではないか。金氏と魚氏という人は朴烈事件とどんな関係があったか、明らかではない。

1925年8月4日付同紙は次のように報道した。

○　不逞社事件免訴、関東地震後、検挙された事件
今まで予審にあり、免訴

まだ記憶に新しい一昨年9月1日日本関東地方大■震災があった日に検挙され、今までまる2年の間予審に付されていた朴烈、金子文子、洪鎮祐、崔至悰、陸洪均、徐東星、鄭泰成、小川武、金重漢、張祥重、徐相庚、可世明、野口品治、栗原一男、韓晛相ら15人に対する無政府主義研究団体の不逞社事件は、今やっと予審を終え、不逞社事件としては予審不起訴で全部免訴されたが、そのうち朴烈、金子文子、金重漢3氏だけは、この事件に関連して治警法と爆発物取締違反犯として再び審理を継続中であるというけれども、当局ではその内容については、まだ秘密だと言っている。

不逞社をさして初めは「秘密結社」と言っていて、今回は「思想研究■団体」と言っている。初めは「不穏な陰謀計画謀議中を一網打尽にした」と言っておき、今回は「朴烈、金子文子、金重漢3人を除外した全員を免訴した」という。つじつまの合わない横説縦説の連続である。はたくだけはたいたが何も出なかったのである。「大陰謀」や「不穏計画」や「爆弾50個押収」などと騒いだから、何人かをつかまえておかなければ政治権力の体面が立たなかったのではないのか。そこで、朴烈と金子文子を脚本の主人公と仕立てたのであろう。

同年11月25日同紙は次のとおり報道している。

○　朴烈事件報道解禁、大衆の叛逆を標榜して無政府主義を宣伝、社会運動と直接行動を目的とする不逞社事件
事件発端梗概

大正12年(1923年)4月頃日本東京府下豊多摩郡代々木町代々木富谷1474番地の秘密の家で大衆の叛逆を標榜して過激な無政府主義の宣伝と主義上必要な社会運動と暴力的直接行動を目的とする不逞社という秘密結社を組織して、その実行に着手したが、朝鮮人南慶尚道生れの朴烈、朴俊植以下11名の朝鮮人と5名の日本人の団体は秘密がバレて最終的には、その年の9月1日(東京震災日)に警視庁に逮捕され、その間の前後の顛末は当局から新聞掲載を禁止され、今まで世間に知らされなかったが、東京地方裁判所石田検事主任の下に平田、黒川、一木の3検事が厳密な取調を行った結果治安警察法■違反罪で起訴され、その間立松予審判事に厳重に

取調べられたところ、再び不敬罪に該当する事実が発覚したので、やっと予審を終結して、公判に回したが、被告達の姓名と犯罪事実は次のとおりだという。

関係者16名（朝鮮人11名 日本人5名）そのうち新山初代は獄死、金子文子と朴烈は昨年から同居。朴烈（準植 26）同夫人金子文子（24）金重漢（25）新山初代（23）渋鎮祐（28）崔圭椋（24）陸渋均（25）徐東星（28）鄭泰成（24）野口品二（25）張祥重（讃寿 27）河一（世明 24）韓晛相（24）栗原一男（25）徐相庚（25）小川茂（27）不敬罪事件は永遠に記載禁止……

このときから不逞社事件は朴烈夫婦に焦点が集中された。同年11月26日には朴烈と金子文子の獄中生活の近況と二人の獄中結婚式が挙行されるという報道があり、12月3日には両人の皇室に対する不敬罪事件特別裁判の延期が報道された。

東亜日報は再び12月6日、弁護士の精神鑑定申請に対し、朴烈は「人を侮辱することのなかで最も甚しいことであり、死をもって拒絶するのみだ」という強硬な意思を裁判長に通告したと報道している。翌日再び獄中結婚式に関する簡単な記事が掲載された。12月24日付同紙は「市谷刑務所 朴烈夫婦近況」という表題で次のような長文の記事を掲載している。

記者は彼女らの安否を知るために市谷刑務所を訪問した。黒色に白い襟をつけた上っぱりを着た朴烈は熱い握手で記者を迎え、このように度々訪ねてくれることに感謝する。しかしこれまでのことは別段考えていないけれども、日本新聞に私に関する記事として、おかしい話が出ているようであるが、それは莫迦という者の所為ということが確実であり、幾人かに記事取消を出せようと依頼した。そして私の兄が大変心配している様で、出来るだけ慰さめてやってくれと言った。市谷刑務所の中で美人と評判が高い彼の妻金子文子は病気だと言うが、どこが苦しいかと尋ねる記者の言葉に、彼女はにこにこして、まるまると肥った手を出して、このとおり元気です。また、病いは毎月決って2日間づつ痛む病なので、別に心配はありません。といい、これからは朝鮮服を着るといって再びにこにこ笑い意味深い頼みが多かったが、彼ら両人は獄中でも豪放な生活をしている。

○ 朴烈の親兄 涙で帰国

監獄にいる朴烈に会ってみようと、日本に渡った彼ら親兄朴廷植氏は、その間東京に滞留して毎日監獄に行き、弟に会って見たところ、本国で老母が待っており、10日には東京を発ち、帰るというのに、氏は自分が家に帰り、老いた母親に告げる言葉が無く、心が痛むと絶句し、涙を流した。…

○ 朴烈 金子の結婚問題、すでに婚姻手続、特別待遇するもよう

東京市谷刑務所内で明年2月に開かれる公判期日を待っている、日本で4

回目に開かれる特別裁判（第1回は幸徳秋水、第2回は露国皇太子狙撃事件、第3は難波大助の皇太子狙撃事件、第4は朴烈夫婦の事件）の主人公朴烈とその妻金子文子両人が獄中結婚式をするということは既報のとおりであるが、これについて伝えられたところによれば、両人に握手までは許すという話や、書面上にのみ手続するだけだとも言うが、刑務所当局者は結婚式をするとすれば、書面上の結婚だけだろう。しかし2人は特別な待遇があるかどうかはわからない。現社会制度のすべてを否定する彼女達の主義の上で見ても、結婚式を挙行するということがおかしく聞こえるので初めは朴烈夫婦が式の挙行に応じなかった。それで我々も彼らの主義から見て勧めることも困難であった。しかし我々は彼らが最後の判決を受けた後のことを考えて彼らに強請をしたのである、それで彼らも仕方なく応じた。本当にこの結婚式こそいたましい結婚式と言えるだろう。しかし、金子の老母は印を押して来はかったが、きっと来る道で婚姻の届出をしているである……（とのこと）